

乳がん検診（巡回）

動 向

協会の乳がん集団検診は、昭和52年厚木市、53年からは神奈川県、55年より横浜市から受託し検診が行われてきた。いずれも視触診による検診である。昭和62年、乳がん検診が老人保健法に組み入れられ実施主体は全て市町村に移行した。

国は、平成12年に乳房エックス撮影（マンモグラフィ）併用検診を指針に盛り込み、協会でも15年より検診車によるマンモグラフィ併用検診を開始した。

国の指針では視触診とマンモグラフィを併用で40歳代は2方向撮影、50歳以上は1方向撮影を2年に1回の受診間隔で実施することとしているが、神奈川県内の集団検診では、30歳代の視触診単独検診や40歳代に1方向撮影をしている市町村もあり、指針に基づく検診・死亡率減少効果が認められる検診の実施が強く求められる。また、21年度より実施された「がん検診推進事業」の無料クーポン検診は5年目を迎え、25年度はマンモグラフィ併用検診のうち28.1%を占めた。初再診別では、マンモグラフィ併用検診全体では初診13.1%、再診86.1%に対して、クーポン利用は初診24.0%と高率で初診者の拡大に有効であり、今後の経年受診に結びつけるよう受診勧奨することが重要である。

検診の実務および精度管理は、当協会が事務局を担当している「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会」の指導により遂行されている。マンモグラフィ検診については、連絡会内に「マンモグラフィ運営委員会」を組織し、撮影および読影の精度の維持・向上のため協議の場として症例検討会を実施している。

方 法

当協会では県域の大都市以外の自治体または大都市でも検診体制の及び難しい地域には、要請があればマンモグラフィ1機（アナログ）搭載1台・CR1機搭載1台、更にデジタル・マンモグラフィ2機搭載の1台の計4機・3台の検診車で巡回し、その地域の基幹病院や医師会の協力を得て視触診とマンモグラフィ（以下MMG）読影を行っている、

読影機関は増加したが、視触診医の確保が難しく、中央診療所からも緊急に医師を派遣せざるを得

ないなど苦勞しているのが現状である。他府県では視触診を省いたMMG単独の検診を行っているところもあり、厚労省でもその方向で検討しているようだが、現在のMMGでは4%検出不能の乳がんがあるとのこと、トモシンセシスの導入がまだ非現実的な現状では、ネガティブな方向へ進むのは如何なものか？

結 果

検診受診者は年々少しづつ減少傾向にあるのは変わらない。まだ乳がん検診がこの疾患による死亡率の減少やクオリティ・オブ・ライフに極めて有効との認識が低く、普及への啓蒙が必要である。また県域では乳がん専門施設がまだ少ないことも影響しているかも知れない。

要精検率9.9%でやっと10%を下回ったが、視触診では2%、MMG併用群では10%前後で前年度と殆ど変わらない。精検受診率は80.5%、視触診の66.7%MMG併用群の80.7%と微増に止まる。発見乳がんは50人、発見率0.25%、陽性的中率3.1%と平均的であるが、横浜市のMMG併用検診に比して、発見率、陽性的的中率ともにまだかなり低く要精検率も高めである。以前より年2回行ってきた精度管理の勉強会（症例検討会）の症例も高度になり討議も盛んになって来たが、参加者が同じ施設からが多く、全体の精度向上には更に多くの施設からの参加者の増加が望まれる。住民や受診者の意識向上には、検診従事者側の意識の向上も不可欠と思われる。

年齢階級別では70歳以上の受診者が18%と最も多く、次いで今回は60～64歳台16%以上で、最も多くの受診を期待される45～59歳台は10%前後とあまり多くない。がん発見数とその割合は60歳以上が27例54%、40歳台以上59歳台23例46%と従来の好発年齢層と高齢者層とに分かれた。県域の地方性も影響しているかも知れない。40歳台の超音波併用検診が待たれるが、最近普及しつつあるトモシンセシスはマンモグラフィと言う点では期待され得ることを考慮して、準備したい。

関係の集計表は104頁に掲載